

# 京鹿子



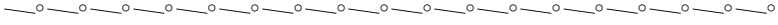
京都府立総合資料館  
京鹿子  
第10号  
平成11年3月号  
発行所：京都府立総合資料館  
〒600-8585 京都市下京区上京町1-1

3月号

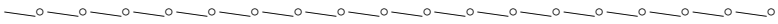
春遠し  
丸山佳子



鳶の笛に冬至の心平らにす  
鼻柱尾花に打たれ帰心急  
源流が攫って行った千支の酉酉  
ご破算にお願いひします札納



まばたきの間も惜し雪の彦根城  
こめかみに力を入れて雪解みち  
本山の御投書箱も雪菩薩  
一訓にユーモアありて白襖  
奈良に来てハッピーイブの鹿に煎餅  
手鏡に雲をうつして春は遠し

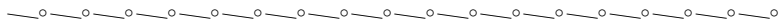


豊 田 都 三 月 号

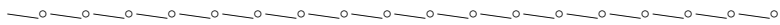
清 響 集 その五十九



枯木立透くるは罨としてをかむ  
埋めきれぬまま寒風のひと日なり  
冬の日を重ねきれずに湖暮るる  
橙のとらへゐる海よりの日矢  
借りのなき身などはなし初霞  
轉身は考へてゐぬ竜の玉



裸木やいまさら転生など無用  
裸木やかげに触るるを許しぬず  
裸木や裏も表もなく暮るる  
風花や小督への径たどりぬる  
枯れきれば今日も日なたとなる中洲  
あをあをと雪解のせかす里ずまひ  
里山の雪解ひなたの大きかり  
ひのくれの遠ひとこゑは残り鴨



## 秀華採集

紅葉ひとひら飛天と化せり吉野門

伊藤希眸

吉野門。京都常照寺の赤門。名妓吉野太夫の寄進による名称。ここに太夫の墓もある。太夫を称え「飛天」と昇華させる思い入れをしているが、それがすべての作品である。

ゆつくりと山が近づく焚火かな

柴田朱美

泥仕合終はつたやうな蓮根掘

林日圓

前句の、焚火に温もる時の心の安らぎのようなもの具象、後句の、例えの確かさをそれぞれ評価する。例えは確かさ、意外性など決まった時は快い。

譚の種

鈴鹿 仁

橋渡る冬の眞ん中一意めく  
さきがけて一片の雲日脚伸ぶ  
いぬふぐり譚はなしの種は濡れいろに  
なやらひや鬼の居ぬ間の山あそび  
たをやかな影は意をもついぬふぐり  
厄落す疾はや風ては白き闇つくる  
雪しづれ峠越さねば世のこゑは

## 近 詠

雪のさと

宇都宮滴水

草の家きのふに代はる今日の雪  
以下同文親しき仲の雪便り  
深雪里初報で足りるやぐら台  
風雪やそろそろ硬き頭蓋骨  
あやふさは餅返しの冬峠  
かたくなな樹氷に壊る陽のかげら  
暗証の覚えあやしき雪女郎

# 神麓集



観阿弥の芸は世阿弥に都鳥  
猿楽や曲舞の技も冬もみぢ  
凍蝶にひよいと出くはず旅の僧  
山眠る僧の旅寝の夢まくら  
観世父子業績燦と蓮枯れる

林 日 圓

湯豆腐やまた降つて来し夜半の雨  
戻ればありともなくて枇杷の花  
鰯の目に競りの漢のムンク貌  
一徹の衰へ父の冬帽子  
踏みしだく草よりもる霜のこゑ

藤 岡 紫 水

光悦寺の苔の起伏に置く紅葉  
紅葉ひとひら光悦垣のたたずまひ  
濃紅葉や仰ぐ名妓の古野門  
紅葉且つ散れる由緒の吉野窓  
鷹ヶ峰の紅葉の刻を尊びぬ

鷹ヶ峰 北村 香 朗

押されつつ入る銀閣庭しぐれ  
秋雨にぬれて冴えたる閑美し  
外人も手を引かれ入る夕しぐれ  
ほど近くながむる閑や秋深む  
指先に除草つむ庭閑くれし

山 田 耕 子

山の上に山あり霧の杉くらべ  
明け鴉啼きめぐりては杉の霧  
しづけさの霧の馬場の脊息弾む  
脊を向けて馬上ゆつたり馬場の霧  
頬杖を春待つ童子に担がれし

頬 杖 丸 山 冬 鳳

秋寂ぶや利休愛せし手洗鉢  
秋愁の藩墓鳥語を聞きながす  
瀬の石に五度目の旧居小鳥来る  
武先の勇武をいなに紅葉照る  
参勤の大津街道並木枯る

角 直 指



# 神麓集



縫ひ直す冬着になじむ鯨尺  
 鬼婆も揃ひ念佛報恩講  
 紅葉散る女紅場の碑風に立つ  
 呆け芒風強ければ夜叉となる  
 落葉せし余白に月を乗す大木

吉田多美

法然院暮秋

北川孝子

身に入むや法然院の廊きしむ  
 須弥壇の散華冷まじ風の音  
 黄葉名残振り返り辞す門堅き  
 寺夕べ捨身のいろの夕芒  
 白砂壇日暮の照葉あかりかな

三月の羽 竹貫 示虹  
 三月の羽うら見せあふつがひ鴨  
 砂利舟の吃水深し燕來る  
 一抜けし人のしあはせ春嵐  
 反戦や雛の目細く細く描く  
 草萌えに太陽ひとつわれ一人

誰も居ぬ終着駅にある小春  
 秋麗や神の脊丈を仰ぎ見る  
 完結と言ふ淋しさに照る紅葉  
 木守柿一頂点にゐる誇り  
 寝酒飲む一部始終を子に見られ

松田都青

年の暮

川崎光一郎

免許証忘れて戻る年の暮  
 隠栖のその後は知れず枯木星  
 八十年ぶり積雪の冬至かな  
 理髪店から煤逃げのしたり顔  
 忘年会深夜帰りの忍び足

壁

伊藤希眸

雪しんしん壁にお日さま画く園児  
 壁に耳家計簿しめる大晦日  
 嗽受く壁のかがやき大旦  
 城壁の上に凍星妃は癒えり  
 見えぬ壁人の世に立ち七日過ぐ



# 京鹿子集

## 豊田都峰選

千葉 伊藤 希眸

檀林や蔦の房の実こぼれつぐ  
光悦の筆の行間照もみぢ  
紅葉ひとひら飛天と化せり吉野門  
枯蓮の根元いつまで生臭し  
無の在り処いかに天寿の冬すみれ  
起き伏しに霧の峠を背負ひけり  
少年のひなたくささに銀杏降る  
ゆつくりと山が近づく焚火かな  
落葉掃き鬼門に風を通しけり  
耳よりな話に葱が甘くなる  
枯木立ガンジス河で沐浴す

舞鶴 林 日圓

鎌倉 柴田 朱美

錦秋の山ふところに塔一つ  
泥仕合終はつたやうな蓮根掘  
長旅の夢を見てゐる浮寝鳥  
落葉径落葉踏む音あるばかり  
大霜や言の刃先の止めどころ  
存へて小春の位置に椅子ひとつ  
剥き出しの神経なぞる冬薔薇  
数へ日や形なきもの捨てられず  
いつの日か腰骨あたり松虫草  
冬うららいつか途絶えし手鞠唄  
幻聴のはじめは雨の冬桜

千葉 直江 裕子

佐々木紗知